

# 心理援助職を目指す大学院生を対象とした新たな研修プログラムの開発

— 簡易版 Magazine Photo Collage の考案と小グループ授業への導入の試み —

今田 雄三\*

(キーワード：心理援助職養成, コラージュ療法, Magazine Photo Collage, 体験的理解)

## I. はじめに

### 1. コラージュ療法の研修法の現状と課題

コラージュ療法の研修では、集団個人法でコラージュ作品を制作し、その後集団内で作品の印象や感想をシェアリングし、それとともにコラージュに関する基本的な講義を行う形式が一般的である。だがこうした研修でコラージュを制作する体験を得ることと、実際の面接においてコラージュ療法を実施することの間にはかなり大きな隔たりが存在する。森谷 (2012) は「コラージュ作品をただ作ればよいというのではない。たしかに作るだけでもなにがしかのカタルシス効果が生じる。しかし、セラピストの役割は、その作品を通して、制作者の心の思いを理解し、その理解したものについて反応を返すという、この一連の継続したプロセス全体に対して責任を負うものである。これが心理療法としてのコラージュということができる」と指摘している。つまりコラージュ療法の研修においては「コラージュ作品をただ作」る体験を提供するだけにとどまらず、「セラピストの役割」を実感できる体験の提供を目指す必要がある。筆者は、心理援助職を目指す大学院生を対象に、「将来自分が担当するケースの面接の中でコラージュ療法を導入・活用する」状況を想定した研修プログラムとして、①ロールプレイに準じた一対一の模擬面接場面でコラージュを制作する、

②一連の作品群に対する継続的な見立ての訓練を行う、③グループスーパービジョン (以下 GSV と表記) や事例検討会に準じた小グループでの検討を実施する、という3つの要素を取り入れ、またコラージュの制作技法として米国の Landgarten, H. B. (1993 / 2003) の考案したマガジン・フォト・コラージュ (Magazine Photo Collage : MPC) を用いた半期 (15 コマ) の授業展開を考案し (図 1)、実践を重ねてきた (今田, 2010)。

上記の授業で実施する MPC とは、コラージュの材料を「人物」と「様々な物」の2つの箱に分けて準備し、第1課題 (「様々な物」の箱から気になった写真を選んで台紙に貼り、連想を語る)、第2課題 (「人物」の箱から写真を4~6枚選んで台紙に貼り、それぞれの写真の人物が「考えていること」と「言っていること」を連想する)、第3課題 (「様々な物」と「人物」の箱のどちらからでもよいので「良いものと悪いもの」を示す写真を4~6枚選んで貼り、写真が表していることを説明する)、第4課題 (「人物」の箱から写真を1枚だけ選んで貼り、「その人物に何が起きているか」を連想する。「その状況が変化するかどうか」を考え、「変化する」と連想した場合には、「何がそれを変えるのか」を説明する) の順に制作を行うことにより、クライアントの葛藤、防衛機制、適応様式を短時間で明らかにすることが出来る技法である (Landgarten, 1993 / 2003)。

筆者がコラージュ療法の研修プログラムに MPC の制作体験を導入した理由としては、先述した3つの要素のうち、②の一連の作品群に対する継続的な見立ての訓練のためには、明確な枠組みの元で連続して制作された MPC の作品群を通覧することで、初学者であってもコラージュ作品に表現されたイメージの展開が捉えやすくなると期待してのことである (今田, 2010)。

### 2. MPC を用いた大学院生への GSV による内的体験についての質的検討

また筆者は、MPC の制作を中核とするコラージュ療法の研修授業が、受講者に対してどのような心理的体験過

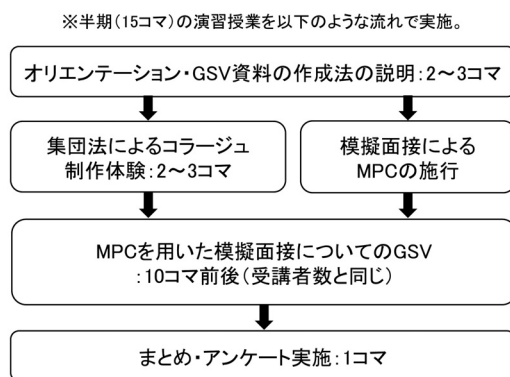


図1 MPC を用いた GSV の演習授業の流れ

\*鳴門教育大学 人間教育専攻

程を生じさせたのかを質的に検討するため、木下(2003)が開発した修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いて分析した結果、①クライアント体験を通して「表現の促進」「感情体験」「内的作業」などの「クライアント役としての内的体験」および、「セラピストとしての自覚」、「セラピストの存在意義の自覚」などを体験すること(図2)、②セラピスト体験を通して「クライアント役との共有体験」、「セラピスト役としての機能」と「解釈についての学び」といった「セラピスト役としての内的体験」、「セラピストとしての自覚」「技法・授業形態の特色の影響」などを体験すること(図3)が明らかとなるとともに、③MPCを用いた授業実践プログラムは体験者にセラピスト役としての役割を自覚させるという点で研修法として有用であり、心理援助者をめざす大学院生がセラピストとしての役割を自覚する上でも意義があることが示唆された(今田, 2020)。

ただし、MPCを用いた授業実践プログラム(今田, 2010)では事前に模擬面接場面でMPCを実施し、解釈を含めたレジメを作成し、GSVに臨むという形式を取るため受講者への時間的負担が大きい。よってクライアント役・セラピスト役の心的プロセスのエッセンスを担保しつつ、より簡便な研修プログラムとして再構成を図ることが課題として浮かび上がった。

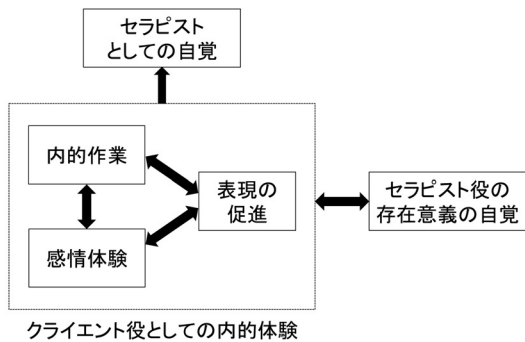


図2 クライアント体験のプロセス

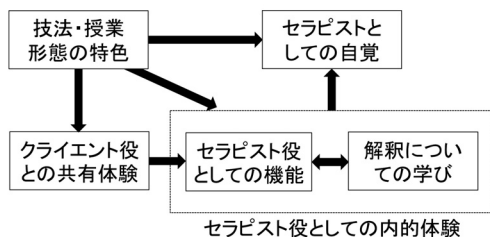


図3 セラピスト体験のプロセス

### 3. MPCを元にしたより簡便なコラージュ技法の考案

前項において指摘された、より簡便な研修プログラムを考案するに当たり、MPCを元にした新たなコラージュ技法を以下の点を検討しつつ具体化していった。

#### (1) 目的

MPCはクライアントの葛藤、防衛機制、適応様式を短時間で明らかにすることを狙って考案されたものである(Landgarten, 1993/2003)が、今回開発する新たなコラージュ技法はあくまで体験者が擬似的なクライアント体験およびセラピスト体験をすることを通して心理援助者としての自覚を促すことを目的とし、必ずしもMPC原法と同等のアセスメント力を担保することにはこだわらず、どれだけ簡易的に実施可能かを主眼とする。

#### (2) 実施の枠組み

Landgarten(1993/2003)では個人面接、家族面接、グループセミナー等の枠組みで制作された作品が紹介されている。今回新たに考案する簡易法では、4名程度の小グループで実施してシェアリングを行うことで参加者が自他の表現や心理の違いを理解することを前提とする。

#### (3) 材料

MPCの原法では、「人物」と「さまざまな物」を入れた箱(コラージュ・ボックス)を分けて準備する。今回開発する簡易法においても、MPCのコンセプトを踏襲して同じ要領で材料を準備する。

#### (4) 台紙

MPCの原法における台紙の大きさは、16×20インチ(40.6×50.8cm)で、新聞印刷用紙(米国では安価かつ入手が容易である)の使用が最適とされる。新しい簡易法では、なるべく短時間で制作が可能になることを考慮し、A4判の薄手のケント紙を使用することにした。

#### (5) 用具類

##### ① 筆記用具

MPC原法では、台紙に写真の連想を書き込みたい場合に備えてマーカー、ボールペン、鉛筆など筆記用具を準備するよう指示されているが、今回の簡易版では別に準備するワークシートに連想を記入してもらうためにボールペンか鉛筆を用意する。

##### ② 糊

MPC原法では液体状とスティック状の2タイプの糊を準備するよう指示されているが、今回の簡易版では手が汚れにくく使い勝手がよいスティックタイプのもののみを準備する。

##### ③ はさみ

MPCの原法では、先端が丸いはさみを準備するよう指示されている。今回の簡易版でも同様とする。

#### (6) 制作枚数

MPCの原法では4つの課題に沿って制作するように設定されている。新たな簡易法でもクライアントの立場

になって課題を制作し作品に表れる表現の違いや心理状態の変化を体験的に理解するためにはどうしても複数の課題が必要となる。そこで最大限の簡略化を行い、2つの課題でコラージュを制作することにする。

#### (7) 各課題での教示

MPCの原法での各課題での教示のエッセンスを順に示すと、第1課題「さまざまな物の中から自由に貼って連想を述べる」→第2課題「人物から4～6枚貼り、『言っていること』と『思っていること』を連想する」→第3課題「さまざまな物・人物のどちらからでも『良いものと悪いもの』を4～6枚貼り説明する」→第4課題「人物を1枚貼り、状況の変化を説明する写真をもう1枚貼って説明する」というものである。前項の通り新たな簡易法の制作枚数は2枚とする構想であるが、原法の第2課題までの教示を踏襲しつつ、使用枚数を減らして簡略化する方向で考える。具体的には1枚目のコラージュでは物の写真のみを使用することとし、また選択した写真同士の関係を考察するためには複数枚を選択する必要があるが、最も簡略化して使用枚数は2枚と指定する。2枚目のコラージュでは人物の写真のみを使用し、『言っていること』と『思っていること』を連想してもらうこととするが、複数の教示による連想によって同じ写真から得られるイメージが作り手の中で変化することの効果を検討し、また所要時間を短縮するという理由からも、使用枚数は1枚とする。また第3課題以降の教示については、新たに写真を選んで貼るのではなく、既に2枚のコラージュで使用した写真に対し、新たなテーマで連想するようワークシートを用いて教示することで反映させる。

#### 4. 本研究の目的

筆者が従来行ってきた MPC を用いたコラージュ体験授業プログラム（今田，2010）によって得られるクライアント体験およびセラピスト体験の心的プロセスのエッセンスを担保しつつ、受講者への時間的負担を軽減したより簡便な研修プログラムとして使用可能な新たなコラージュ技法を開発し、小グループにおいて試用した授業実践を紹介し、その効果を検討する。

## II. 方法

### 1. 実施時期

2021年1月、大学院科目「臨床心理基礎実習」における小グループ単位での授業の一部として実施した。

### 2. 対象者

心理援助職を目指す修士課程1年次生4名を対象に、小グループで実施した。

### 3. 準備物

I. 「はじめに」の3. (3)～(5)の項目での検討に基づき、以下のとおり必要なものを準備した（図4）。



図4 簡易版 MPC の準備物

#### (1) コラージュ材料

「人物」の写真が入ったコラージュ・ボックスと「さまざまな物」の写真が入ったコラージュ・ボックスを参加者につき1箱ずつ用意した。コラージュ・ボックスの大きさはB5判の写真が折らずに入るサイズとし、1箱につき約60～70枚の写真の切り抜きを入れておいた。写真の選択はLandgarten (1993 / 2003) の記述に従って行った。

#### (2) 台紙

参加者1名につき、A4判の薄手のケント紙を2枚配布した。

#### (3) 道具類

参加者ごとにスティックタイプの糊と先端が丸いはさみを各1個ずつ配布した。ワークシートに連想を記入してもらうための筆記用具は各自が持参したものを使用してもらった。

#### (4) ワークシート

コラージュ作品への連想を記入してもらうための簡単な質問を印刷したワークシートを作成し、教示する順に上から綴じて小冊子のような体裁に整えた上で各自1部ずつ配布した（表1-①～④）。

表1-① ワークシート（1枚目）

<p>「物」の写真について</p> <p>選んだ写真①: _____</p> <p>連想: _____</p> <p>選んだ写真②: _____</p> <p>連想: _____</p>
---

表1-② ワークシート（2枚目）

「人物」の写真について

選んだ写真： \_\_\_\_\_

考えていること：

言っていること：

表1-③ ワークシート（3枚目）

選んだ写真のイメージについて

「物」の写真①のイメージは： ポジティブ ・ ネガティブ

理由：

「物」の写真②のイメージは： ポジティブ ・ ネガティブ

理由：

「人物」のイメージは： ポジティブ ・ ネガティブ

理由：

表1-④ ワークシート（4枚目）

「人物」の写真の状況について

写真の人物はどんな状況にある？

写真の人物の状況は： 変化する ・ 変化しない

どう変化する？

何がそれを変える？

#### 4. 実施手順

##### (1) 導入時の説明

まず最初に「これからコラージュ制作を通して心理療法のクライアントの心理過程を体験的に理解してもらおうと思います。今回のコラージュ制作には正解や間違い、美的な優劣などはありませんので、あまり難しく考えず、教示を聞いて写真を見ていて、気になったり、使ってみようと思った写真を選んで貼ってもらい、連想してもらえば結構です」と今回の体験についての説明を行った。

##### (2) 第1課題の教示とワークシート（1枚目）への記入・シェアリング

次に「それでは、まず『さまざまな物』の写真が入っ

ている箱を開けて、中の写真を見て、気になったり、心に引っかかってきた写真を2枚だけ選び出して、1枚目の台紙に貼って下さい。貼り方は自由ですし、はさみを使って写真を加工することも自由です。選んだ写真を貼り終わったら、お手元に配ってあるワークシートの1枚目を読んで、どんな写真を貼ったのか、また写真についての連想を記入して下さい。全員が貼り終わったら、自分の作品を見せながら、連想を一人ずつ順に紹介して下さい」と教示した。作品と連想の紹介（シェアリング）の際は、適宜質問や印象を伝え合った。

##### (3) 第2課題の教示とワークシート（2枚目）への記入・シェアリング

上記が終了した後「続いて、『人物』の写真が入っている箱を開けて、中の写真を見て下さい。その中から1枚だけ選んで、2枚目の台紙に貼って下さい。貼り方は自由ですし、はさみを使って写真を加工することも自由です。貼り終わったら、ワークシートの2枚目を読んで、どんな人物を貼ったのか、また写真に写っている人物が『何を思っているのか』『何を喋っているのか』を連想し記入して下さい。全員貼り終わったら、先程と同様の手順で紹介してもらいます」と教示し、作品の完成後のシェアリングを行った。

##### (4) ワークシート（3枚目）への記入・シェアリング

第2課題のシェアリング終了後、「それでは、ワークシートの3枚目を見て下さい。今度は今まで貼ってもらった3枚の写真について、『ポジティブなイメージ』を受けるか、あるいは『ネガティブなイメージ』を受けるかを考えて、どちらか一方を選んで○をつけて下さい。またそう思った理由についても簡潔に記入して下さい。全員記入し終わったら、先程と同様の手順で紹介し合ってもらいます」と教示し、写真へのイメージについてシェアリングを行った。

##### (5) ワークシート（4枚目）への記入・シェアリング

ワークシート（3枚目）のシェアリング終了後、「それでは、ワークシートの4枚目を見て下さい。最初は人物の写真について、『どんな状況なのか』を想像して簡潔に記入して下さい。次に『その状況は変化するか・しないか』を考えるとどちらかに○をして下さい。『変化しない』場合はそれで記入終了です。『変化する』場合は、『どう変化するか』『何がそれを変えるのか』を想像して、それぞれ簡潔に記入して下さい。全員記入し終わったら、また同様の手順で紹介し合ってもらいます」と教示し、人物の写真の状況にまつわる連想についてシェアリングを行った。

##### (6) 感想の記入

コラージュ制作体験とシェアリングの終了後、「クライアントが経験する心の動きをどの程度感じたか」、および「今回の体験の感想」について回答を求めた。



なお本研究は鳴門教育大学人を対象とする医学系研究に関する倫理審査委員会の承認を得た上で実施した。

### III. 結果

#### 1. 所要時間

第1課題、第2課題ともコラージュの制作に約10分、各ワークシートの記入に約5分、シェアリングにそれぞれ約5分を要し、所要時間は全体で約1時間であった。

#### 2. 参加者の制作したコラージュ作品

対象者4名が制作した第1課題および第2課題のコラージュ作品を以下に提示する(図5-①~④)。

##### (1) 形式分析

今田(2019)のMPCの表現特徴の調査項目を参考に、以下のように今回のコラージュ作品について形式分析を行った。

##### ① 白黒写真の使用

第2課題で1枚のみ該当していた(参加者D)。

##### ② 極大サイズの切片の使用(台紙の1/4以上)

第1課題では2枚(参加者A、B)が、第2課題では全てが該当していた。

##### ③ 極小サイズの切片の使用(台紙の1/50以下)

該当者はみられなかった。

##### ④ 教示への違反

該当者はみられなかった。

##### ⑤ 輪郭切り

第2課題で2名が輪郭切りを行っていた。ちなみに参加者全員が「形を整える」「不要な部分を落とす」などの目的で材料の写真に何らかの加工を行っていた。

##### ⑥ 矩形(切片の全てが長方形か正方形)

第2課題の2枚で矩形の表現がみられた。

##### ⑦ 台紙を縦向きに使用

第1課題では3枚、第2課題では2枚が該当した。参加者別では、横向きと縦向きが1枚ずつが3名、両方とも縦向きが1名、両方とも横向きの者はいなかった。

##### ⑧ 余白が台紙の1/3以上

全ての作品が該当した。

##### ⑨ 台紙の中央の大きな余白

第1課題で1枚のみ該当していた(参加者D)。

##### ⑩ 台紙に余白がほとんどない

該当者はみられなかった。

##### ⑪ 重ね貼り

第1課題で2枚が該当した(参加者A、B)。

##### ⑫ 台紙からはみ出し

該当者はみられなかった。

##### (2) 内容分析(物の写真)

今田(2019)のMPCの表現特徴の調査項目を参考に

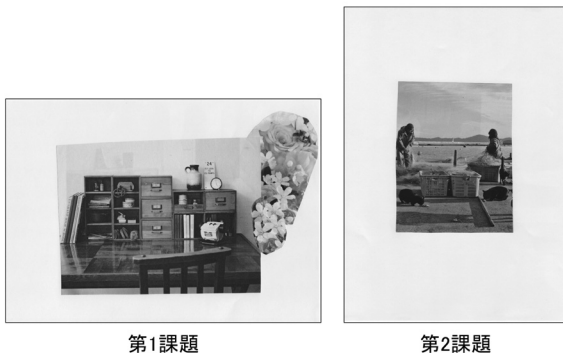


図5-① 参加者Aのコラージュ作品

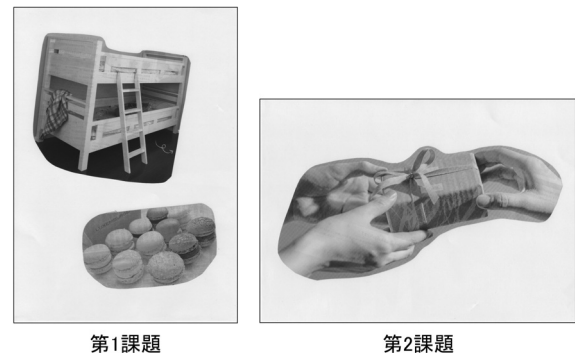


図5-③ 参加者Cのコラージュ作品

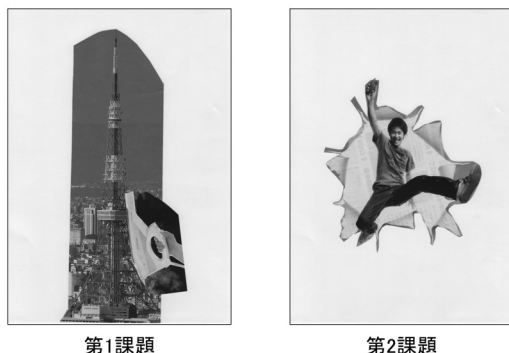


図5-② 参加者Bのコラージュ作品

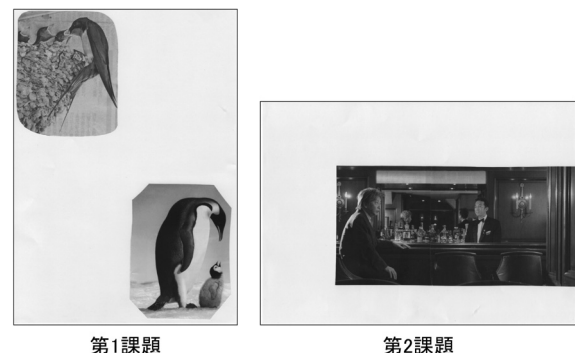


図5-④ 参加者Dのコラージュ作品

して、以下のように今回のコラージュ作品で使用された物の写真8枚について内容分析を行った。

① 「動物」の写真

2枚が選ばれていた(参加者D)。

② 「植物」の写真

1枚が選ばれていた(参加者A)。

③ 「建物(建造物)」の写真

1枚が選ばれていた(参加者B)。

④ 「室内・家具」の写真

2枚が選ばれていた(参加者A, C)。

⑤ 「飲食物」の写真

1枚が選ばれていた(参加者C)。

⑥ 「道具」の写真

1枚が選ばれていた(参加者B)。

※上記以外の調査項目である、「自然風景」「夜景」「乗物」「食器」「酒・タバコ」「薬剤」「衣類」「装飾品」「時計」「電子デバイス」「機械」「芸術」「宗教」「火」「水」「戦いを連想させる物」「危険物」「死・破壊を連想させる物」の写真については選ばれていなかった。

(3) 内容分析(人物の写真)

今田(2019)のMPCの表現特徴の調査項目を参考にして、以下のように今回のコラージュ作品で使用された物の写真4枚について内容分析を行った。

① 人数

「1人」が1枚(参加者B),「2人」が3枚だった(参加者A, C, D)。

② 年代

「青年」が2枚(参加者B, C),「大人」が2枚(参加者A, D)だった。

③ 写っている人同士の関係性

「同僚」が1枚(参加者A),「カップル」が1枚(参加者C),「客と店員」が1枚(参加者D)だった。

④ 従事(何をしているところか)

「仕事」が1枚(参加者A),「飲酒」が1枚(参加者D)だった。

⑤ 動作

「座る」が1枚(参加者D),「立つ」が2枚(参加者A, D),「走る」が1枚(参加者B)だった。

⑥ 表情

「笑う」が1枚(参加者B)だった。

⑦ 体の向き

「正面」が1枚(参加者B),「斜め前」が2枚(参加者A, D),「横」が2枚(参加者A, D)だった。

⑧ 写っている範囲

「全身」が2枚(参加者A, B),「半身程度」が2枚(参加者A, D)「体の一部」が1枚(参加者C)だった。

⑨ 特異な人物像(有名人, キャラクター, イラスト等)

該当するものはなかった。

⑩ 強いメッセージ性の存在

「過去」,「闘争・戦争」,「危険」,「死」,「医療」等に関連する人物像に該当するものはなかった。

3. 参加者の写真への連想

対象者4名がコラージュで使用した写真に対する連想をワークシートへの記述を元に提示し(表2-①~④),以下に全体としての連想の傾向を簡単にまとめた。

(1) ワークシート2枚目の連想

写真の人物が「思っていること」と「言っていること」が全員で一致しており,不一致である例はなかった。

(2) ワークシート3枚目の連想

全ての写真については「ポジティブ」が9枚,「ネガティブ」が3枚だった。物の写真のイメージについては「ポ

表2-① 参加者Aの連想

	選んだ写真	ワークシートへの記入内容
物の写真	①机	【連想】すてきだな。家にあつたらいい。 【イメージ】ポジティブ。【理由】ここから何かが生み出されそう。文章が書かれたりしそう。
	②花	【連想】きれいだな。家にあつたらいいな。 【イメージ】ポジティブ。【理由】見て,心がやすらぐ感じはする。プレゼントにもされる。空間が明るくなる。花も色もそういうイメージがある。
人物の写真	漁師とねこ	【考えていること】いつもの通りの仕事。あと何の仕事しないといけないかな。 【言っていること】今日もがんばった。おつかれ。魚うまいか?(ねこに向かって)
		【イメージ】ポジティブ。【理由】生きるための行為だから。とても当たり前のことだけど欠かせないから。人が働くこと。ねこが食べること。
		【状況】生活の中にある。日常の中にある。
		【どう変化する】毎日の仕事は変わらないけど,季節が変化したり,とれる魚が変わったりしていく。人も年を取ったり,思うことが変わったりしていきそう。 【何がそれを変える】時間。季節。自然。人間。

表2-② 参加者Bの連想

	選んだ写真	ワークシートへの記入内容
物の写真	①東京タワー	【連想】巨大, 中心, 赤色 【イメージ】ポジティブ。【理由】背景の青空。
	②アイロン	【連想】熱い, 押しつけられる 【イメージ】ネガティブ。【理由】押しつけられている感じ, 家事のめんどうさ, 熱の危険さ, 背景の黒さ
人物の写真	飛び出している男性	【考えていること】うれしい!! カード取れた!! 【言っていること】ヤッター!!
		【イメージ】ポジティブ。【理由】ステキな笑顔, 飛び出している躍動感
		【状況】うれしさのあまり飛び上がっている状況。幸せのピーク
		【どう変化する】落ちついていく 【何がそれを変える】時間, カードがあるのが当たり前になっていく

ジティブ」が7枚、「ネガティブ」が1枚だった。人の写真のイメージについては「ポジティブ」が2枚、「ネガティブ」が2枚だった。各対象者ごとでは「全てポジティブ」が2名（参加者 A, C）, 「2枚がポジティブ, 1枚がネガティブ」が2名（参加者 B, D）だった。

(3) ワークシート4枚目の連想

全員が「状況が変化する」と連想していた。

表2-③ 参加者 C の連想

選んだ写真	ワークシートへの記入内容
物の写真 ①二段ベッド	【連想】 将来きれいな可愛いお家に住みたいと思った。
	【イメージ】 ポジティブ。【理由】 幸せな家庭のイメージだから。
物の写真 ②マカロン	【連想】 この間食べたマカロンを思い出した。
	【イメージ】 ポジティブ。【理由】 色が可愛くて写真映えもするし美味しいので。人を幸せにするものだと思うから。
人物の写真 プレゼントを渡している写真	【考えていること】 相手を思う大切な気持ちが詰まったプレゼントを渡して、思いは伝わったかな？と考えている。
	【言っていること】 はい！これ。喜ぶかわかんけど…（笑）
	【イメージ】 ポジティブ。【理由】 人と人のつながりを感じる暖かい写真に見えるから
	【状況】 恋人同士が天気の良い日にお散歩していて、2人にとっての節目のタイミングで、彼女が彼氏に突然プレゼントを渡した。
	【どう変化する】 思い出を語り合ってお互いに感謝の気持ちを伝え合う。その後、2人でやりたいことを考えて、帰る（同じ家に）。
	【何がそれを変える】 彼女がプレゼントを渡したことで、雰囲気が明るくなる。

表2-④ 参加者 D の連想

選んだ写真	ワークシートへの記入内容
物の写真 ①ツバメの親が子どもに餌をあげているところ	【連想】 小学生の時、ツバメの巣と、ツバメの親子を見つけた。教科書でしか見たことがなかったから感動した。
	【イメージ】 ポジティブ。【理由】 親が子どもに持ってくる、親子愛の形が映されているから。
物の写真 ②ペンギンの親子	【連想】 小さい頃からペンギンが好きで、(自分にとっての) イメージアニマルのようになっていた。
	【イメージ】 ポジティブ。【理由】 親が子を、子が親を見て、心がつながっているように思えた。
人物の写真 バーのような場所にいる男性と店員	【考えていること】 会えると思っていた人がやって来たことに対する驚き。
	【言っていること】 お前、どうしてここに…？
	【イメージ】 ネガティブ。【理由】 左の男は驚き、店員は無表情で、背景はモノクロ。シリアスなドラマ性を感じ取った。
	【状況】 やって来たのは元奥さんで、店員はグル。左の男は何も知らなかった。左の男と話をしたくて元奥さんはやって来た。男は2度と合うことはないと思っていたので驚いている。
	【どう変化する】 安心する。
【何がそれを変える】 元奥さんの現在（別れた後の話）を知ったから。男は、妻と別れた方がいい理由があって仕方なく実を引き、奥さんは最近その理由を知った？	

4. 参加者の感想

コラージュ制作体験とシェアリングの終了後に回答したクライアント体験のセルフチェックの参加者全体の集計(表3)、および各参加者ごとのセルフチェックの回答と感想(自由記述)を示した(表4-①~④)。

表3 クライアント体験のセルフチェック (全員)

チェック項目	回答数 (n=4)				
	非常に当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらず	ほとんど当てはまらず	
クライアント体験の促進	意外な表現が出てきた	2		2	
	自分らしさが出ていた	2	2		
	状況が反映されていた	2	2		
	表現への抵抗を感じた		2	1	1
	教示が表現に影響した		2	1	1
感情体験	言語化が促進された	1	1	2	
	ポジティブな感情が起こった	2	1	1	
	ネガティブな感情が起こった			3	1
内的作業	ポジネガの感情間で葛藤した			2	2
	感情の変化が生じた	1	1	1	1
	自己への気づきがあった	1	2	1	
ファシリテーターの存在	自己への内省が生じた	2	1	1	
	自他の違いに気づいた	2	1	1	
	見守られている感覚があった		2	2	
セラピーでの活用の想定	ラポールが得られていた		4		
	能動的な働きかけを感じた		3	1	
	共同作業をしている感覚がした			4	
感想(自由記述)	コラージュの扱い方の理解を理解した		4		
	セラピストの姿勢が理解できた		3	1	

表4-① クライアント体験のセルフチェック (参加者 A)

チェック項目	回答 (当てはまる箇所) (○)			
	非常に当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらず	ほとんど当てはまらず
クライアント体験の促進	意外な表現が出てきた			○
	自分らしさが出ていた		○	
	状況が反映されていた	○		
	表現への抵抗を感じた		○	
	教示が表現に影響した			○
感情体験	言語化が促進された			○
	ポジティブな感情が起こった			○
	ネガティブな感情が起こった			○
内的作業	ポジネガの感情間で葛藤した			○
	感情の変化が生じた		○	
	自己への気づきがあった	○		
ファシリテーターの存在	自己への内省が生じた	○		
	自他の違いに気づいた	○		
	見守られている感覚があった			○
セラピーでの活用の想定	ラポールが得られていた		○	
	能動的な働きかけを感じた		○	
	共同作業をしている感覚がした			○
感想(自由記述)	コラージュの扱い方の理解を理解した		○	
	セラピストの姿勢が理解できた		○	
感想(自由記述)	バウムテストのように解釈することが中心だと思っていたため、作品について Cl と Th が話をしながら、感覚を共有していくものであることがわかった。主観と客観をすりあわせるような作業になるのだろうと感じた。			

表 4-② クライアント体験のセルフチェック (参加者 B)

	チェック項目	回答 (当てはまる箇所に○)				
		非常に当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらず	ほとんど当てはまらず	
クライアント役の内的体験	表現の促進	意外な表現が出てきた	○			
		自分らしさが出ていた		○		
		状況が反映されていた		○		
		表現への抵抗を感じた			○	
		教示が表現に影響した		○		
		言語化が促進された			○	
	感情体験	ポジティブな感情が起こった	○			
		ネガティブな感情が起こった			○	
		ポジネガの感情間で葛藤した			○	
		感情の変化が生じた			○	
	内的作業	自己への気づきがあった		○		
		自己への内省が生じた	○			
自他の違いに気づいた		○				
ファシリテーターの存在	見守られている感覚があった		○			
	ラポールが得られていた		○			
	能動的な働きかけを感じた			○		
	共同作業をしている感覚がした			○		
セラピーでの活用想定	コラージュの扱い方の理解を理解した		○			
	セラピストの姿勢が理解できた			○		
感想 (自由記述)	ワークを通してクライアントが経験する言語表現のむずかしさのようなものを感じた。直観で写真を選ぶことが多く、それを改めて言葉にするのは難しいと感じた。					

表 4-④ クライアント体験のセルフチェック (参加者 D)

	チェック項目	回答 (当てはまる箇所に○)				
		非常に当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらず	ほとんど当てはまらず	
クライアント役の内的体験	表現の促進	意外な表現が出てきた	○			
		自分らしさが出ていた	○			
		状況が反映されていた	○			
		表現への抵抗を感じた				○
		教示が表現に影響した		○		
		言語化が促進された	○			
	感情体験	ポジティブな感情が起こった	○			
		ネガティブな感情が起こった			○	
		ポジネガの感情間で葛藤した				○
		感情の変化が生じた	○			
	内的作業	自己への気づきがあった		○		
		自己への内省が生じた			○	
自他の違いに気づいた			○			
ファシリテーターの存在	見守られている感覚があった		○			
	ラポールが得られていた		○			
	能動的な働きかけを感じた		○			
	共同作業をしている感覚がした			○		
セラピーでの活用想定	コラージュの扱い方の理解を理解した		○			
	セラピストの姿勢が理解できた		○			
感想 (自由記述)	何よりも難解なのはコラージュの解釈であると感じた。意図的に作られたものか、ただのランダムか、それを見極めるだけでも難しいのに、つながりを感じるのは今の私には不可能に近い。もっと力をつけるべきだと感じた。					

表 4-③ クライアント体験のセルフチェック (参加者 C)

	チェック項目	回答 (当てはまる箇所に○)			
		非常に当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらず	ほとんど当てはまらず
クライアント役の内的体験	表現の促進	意外な表現が出てきた			○
		自分らしさが出ていた	○		
		状況が反映されていた		○	
		表現への抵抗を感じた		○	
		教示が表現に影響した			○
		言語化が促進された		○	
	感情体験	ポジティブな感情が起こった		○	
		ネガティブな感情が起こった			○
		ポジネガの感情間で葛藤した			○
		感情の変化が生じた			○
	内的作業	自己への気づきがあった			○
		自己への内省が生じた		○	
自他の違いに気づいた				○	
ファシリテーターの存在	見守られている感覚があった			○	
	ラポールが得られていた		○		
	能動的な働きかけを感じた		○		
	共同作業をしている感覚がした			○	
セラピーでの活用想定	コラージュの扱い方の理解を理解した		○		
	セラピストの姿勢が理解できた		○		
感想 (自由記述)	コラージュを見て連想が湧き、楽しかったが、全て自分の価値観に当てはめているような気がして不安になった。また、クライアントとして体験して、どのような気持ちの変化が起こっていくのかを体感できた。				

IV. 考察

1. 簡易版 MPC と原法との比較について

(1) 参加者への負担の軽減について

今回試用した簡易版 MPC では、作品の制作、ワークシートへの記入およびシェアリングまでの行程は1時間程度であり大学院の授業時間内で全て実施可能であった。従来の MPC を中核とした GSV の授業では、授業時間外に受講生同士が MPC を使った模擬面接を行い、セラピスト役が GSV での発表のための作品の解釈などに相当の時間を要していたが、今回の方法では事前準備なく「今、この場」で表現されたもの、浮かんできた連想をグループ内で共有することで、時間的な負担を大幅に軽減することが出来た。なおその際、ファシリテーター役の教員がグループを自由に守られた場として成立・維持させることで参加者が率直に作品や連想について語り、内的プロセスが進行することを促すことが肝要である。

(2) 簡易版 MPC の作品について

MPC 原法への基礎的研究 (今田, 2019) の形式分析のデータと比較し、今回の簡易版 MPC の第1課題では①白黒写真の使用、③極小切片の使用、④教示への違反、⑤輪郭切り、⑥矩形、⑩台紙の余白がほとんどない、⑪重ね張り、⑫台紙からのみ出しの出現頻度が少なく、逆に②極大サイズの切片の使用、⑦台紙を縦向きに使用、⑧余白が台紙の1/3以上、⑨台紙の中央の大きな余白の頻度が多かった。また第2課題では①白黒写真の使用、③極小切片の使用、④教示への違反、⑩台紙の余白がほ



とんどない、⑩重ね張り、⑪台紙からのみ出しの出現頻度が少なく、⑫極大サイズの切片の使用、⑬輪郭切り、⑭矩形、⑮台紙を縦向きに使用、⑯余白が台紙の1/3以上、⑰台紙の中央の大きな余白の頻度が多かった。今回各課題の教示や台紙サイズを変更したため、原法とは各表現特徴の出現頻度が異なるのは当然であるが、今後さらにデータを増やして簡易版の特徴を明確にしたい。

また内容分析に関しては、4名分のデータから MPC と比較してどの属性の写真が選ばれやすいか推定するのは困難だが、特定の内容の写真に偏ることなく、作り手の興味関心や経験、内面などを反映して多様な選択がなされ、また連想もよく引き出されていた。Landgarten (1993/2003) は MPC のコラージュボックスに何枚位の写真の切り抜きを入れておくのか特に記述していないが、今回の実施からは 60～70 枚程度で十分に内的過程にコミットしたコラージュ体験が可能だと思われる。

## 2. 参加者の内的体験過程について

表 3 から、今回の参加者はクライアント体験について、表現の促進の各項目では「非常に当てはまる」「やや当てはまる」と回答した者が多かった。また感情体験ではポジティブな感情を感じた者は多いが、ネガティブな感情、葛藤を感じたものは少なかった。さらに内的作業、ファシリテータの存在、セラピーでの活用の想定各項目では「非常に当てはまる」「やや当てはまる」と回答した者が多かった。よって、今回の簡易型 MPC の試行において参加者は概ね安全にコラージュを用いた擬似的なクライアント体験できたと思われる。ただし、ネガティブな感情や葛藤がコラージュ制作や連想の中で生じた場合でも、それを受け止められながら感情が変化していくのを体験することも、心理援助者を目指す大学院授業では求められていると考えるべきである。今後はこうした点について授業としての対応力向上を目指したい。

次に、今回の参加者がどのような内的体験を経験したのかを表 4-①～④の回答をもとにして考察しておく。

参加者 A は気づきや内省、自他の違いなどの内的作業の経験を強く自覚し、クライアントとセラピストが対話しながら感覚を共有することの大切さを感じていた。

参加者 B は、表現の促進をある程度感じつつ、内的作業を行い、クライアントが内面を言語化することの難しさに気づいたようであった。

参加者 C は表現や連想を楽しみつつも、自分の価値観に懐疑的となり内的作業がやや進まなかった。一方クライアントの立場での内的過程を体感することが出来た。

参加者 D は表現が非常に促進され楽しめたが、コラージュの解釈やクライアントとの関係性などを感じ取ることの難しさを自覚し、向上心が賦活された。

このように、コラージュ体験後にセルフチェックを行

うことで大学院生の自己理解や心理援助者としての学習を促進するという意義とともに、教員が今後の指導上の手がかりを得るといった利点があることも示唆された。

## V. 今後の課題

今回、簡易版 MPC を考案して心理援助者を目指す大学院生に対し、小グループでの演習授業として試行した。今後さらに実施を重ねて技法上の特徴を理解すると共に、修了後の心理援助者の研修法としても活用可能かを含め検討していきたい。

なお、本研究は、平成 30 年～令和 2 年度科学研究費（基盤研究 C：課題番号 18979063）の助成を受けた。

## 文献

- 今田雄三、臨床心理士養成課程におけるコラージュ療法体験授業の展開：施行法・技法の選択・検討法などの工夫を中心に、鳴門教育大学研究紀要, 25, pp.218 – 231, 2010.
- 今田雄三、マガジン・フォト・コラージュ (MPC) に関する基礎的研究—解釈の指標となる基礎的データの検討—, コラージュ療法学研究, 10(1), pp.3 – 15, 2019.
- 今田雄三、マガジン・フォト・コラージュ (MPC) を用いた大学院生へのグループスーパービジョンの効果について—「クライアント体験」「セラピスト体験」に関する M – GTA を用いた検討—, コラージュ療法学研究, 11(1), pp.15 – 27, 2020.
- Landgarten, H. B., Magazine Photo Collage: A multicultural assessment and treatment technique, Brunner Routledge, Inc, 183p., 1993. (近喰ふじ子・森谷寛之・杉浦京子・入江茂・服部令子 (訳), マガジン・フォト・コラージュ—心理査定と治療技法, 誠信書房, 221p., 2003.)
- 森谷寛之, コラージュ療法実践の手引き その起源からアセスメントまで, 金剛出版, 232p., 2012.